

令和6年度病虫害発生予察情報 発生予報第2号

令和6年5月29日
発表：福島県病虫害防除所

1 普通作物

作物名	病虫害名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
水 稲	いもち病 (葉いもち)	全 域	平年並	平年並	天候予報(5月23日発表1か月予報)によると、向こう1か月の気温は平年並から高く、降水量は平年並から多いと予想されている(±)。	補植用置苗は本病の伝染源となるため、補植を終えたら速やかに処分する。 窒素肥料の多用をさける。
	イネドロ オイムシ	全 域	早い	平年並	有効積算温度によるシミュレーションでは、幼虫のふ化盛期は平年より早いと予想される。 天候予報によると、向こう1か月の気温は平年並から高く、降水量は平年並から多いと予想されている(±)。	発生が目立つ場合は、薬剤による防除を行う(要防除水準:3~4齢幼虫が1株当たり10頭以上寄生)。 移植が遅い場合は被害が大きくなりやすいので注意する。
	イネミズ ゾウムシ	全 域	早い	平年並	有効積算温度によるシミュレーションでは、成虫の侵入は平年より早いと予想される。 育苗箱施用薬剤の普及により、被害は抑えられている(±)。	成虫の寄生が100株当たり40頭以上確認される場合や、水田内のほぼ全葉に食害がみられる場合は水面施用剤を散布する。
	イナゴ類	全 域	—	やや少ない	発生ほ場割合、すくい取り数は近年減少傾向にある(—)。	例年発生が多いほ場では、6月中旬~7月上旬にふ化幼虫を対象として薬剤散布を行う。
麦 類	赤かび病	全 域	—	平年並	天候予報によると、向こう1か月の気温は平年並から高く、降水量は平年並から多いと予想されている(±)。	発病した場合は刈り分けを行うなど、被害粒の混入を防ぐ。 適期収穫を心がけ、収穫後は速やかに乾燥・調製を行う。
	うどんこ病	全 域	—	平年並	5月中旬の調査では、各地方とも発生は確認されなかった(±)。	薬剤防除を行う場合は、収穫前日数に注意する。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(—)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

2 果樹

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全域	—	平年並	5月下旬の新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	
	褐斑病 (今年度より5月の予報に追記)	全域	やや早い	やや多い	5月下旬の新梢葉での発生は平年同様に確認されなかった(±)が、果そう葉での発生ほ場割合は平年よりやや高く(+)、発生時期もやや早かった。	本病の子のう胞子は6月下旬頃までは飛散する。また、本年は果そう葉での発生が早く、発病葉からの分生子の飛散も早まるため、薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。
	腐らん病	全域	—	平年並	5月下旬の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	枝腐らんは見つけしだい健全部5cm以上含めて切り取る。 胴腐らんは見つけしだい周囲の健全部まで5cm広く削り取り、殺菌塗布剤を塗布する。
	キンモンホソガ	全域	—	平年並	5月下旬の新梢葉被害は平年同様に確認されなかった(±)。	
	アブラムシ類	全域	—	やや少ない	5月下旬の新梢寄生の発生ほ場割合は平年よりやや少なかった(-)。	
	ハダニ類	全域	—	平年並	5月下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
モモ	灰星病	中通り	—	やや多い	5月上旬の花腐れの発生ほ場割合は平年よりやや多かった(+) 。	本病による枝枯れは見つけしだいせん除し、園外に持ち出すなど適切に処分する(令和6年5月9日付け令和6年度病害虫防除情報(モモ灰星病)参照)。
	せん孔細菌病	中通り	—	やや少ない	5月上旬及び下旬の春型枝病斑の発生ほ場割合は平年よりやや少なかった(-)。	発病部位のせん除を徹底する。薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。 本病の発生が多い場合は、仕上げ摘果後、直ちに袋かけを実施する。 今後の気象経過によっては、発生が急増する可能性もあるので油断することなく対策を実施する。
	モモハモグリガ(第1世代成虫)	中通り	—	平年並	5月下旬の新梢葉被害の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	本種の発生には放任園や無防除のハナモモ園が影響していると考えられるため、こうした発生源が近隣に存在する園地では、今後も発生に注意する。
	アブラムシ類	中通り	—	平年並	5月下旬の新梢寄生は確認されなかった(±)。	

モモ	ハダニ類	中通り	—	平年並	5月下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
ナシ	黒星病	全域	—	平年並	5月上旬及び下旬の果そう基部病斑の発生ほ場割合は平年よりやや少なかった(－)が、果実での発生(果面での発生が多い)が確認されたほ場が複数あった(+)	果そう基部病斑や発病葉・果実は、徹底して除去し、園外に持ち出すなど適切に処分する。 「幸水」では果実の感受性が高まる時期(満開後50～90日)を迎えるため、防除を徹底する。薬剤散布は降雨前の実施を心がけ、散布間隔があきすぎないように注意する。
	アブラムシ類	全域	—	やや少ない	5月下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年よりやや少なかった(－)。	
	ハダニ類	全域	—	平年並	5月下旬の新梢葉寄生の発生ほ場割合は平年並であった(±)。	要防除水準(1葉当たり雌成虫1頭以上)に達した場合は、殺ダニ剤を散布する。
果樹共通	カメムシ類	全域	—	やや多い	モモ調査ほ場への飛来及び果実被害の発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+) 指標植物(サクラ)への飛来数は平年並であった(±)。	越冬世代成虫による加害は幼果期から始まるため、特に山沿いの園地ではよく観察し、飛来を確認したら速やかに薬剤防除を実施する(令和6年5月9日付け令和6年度病害虫防除情報(果樹カメムシ類)参照)。

注) 予報の根拠の中で(+)は多発要因、(－)は少発要因、(±)は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

リンゴ・モモ・ナシ等	<p>■ナシヒメシンクイ</p> <p>ナシヒメシンクイ第1世代成虫の誘殺盛期は、気温が2℃高く推移した場合、6月2半旬頃と予測され、第2世代の防除適期は6月4半旬頃と推定されています(農業総合センター果樹研究所、5月26日現在)。</p> <p>モモの巡回調査の結果、本種による芯折れは5月上旬には確認されなかったものの、5月下旬では複数ほ場で確認されました。また、果樹研究所内のフェロモントラップでは、例年より多く越冬世代の雄成虫が誘殺されています。</p> <p>本種の第2世代以降はナシなどの果実に移行します。例年、ナシでの果実被害が多い地域では、近隣のモモ等における防除も徹底してください。なお、薬剤による防除を実施する場合には、使用基準を遵守してください。</p>
モモ	<p>■シロカイガラムシ類</p> <p>5月下旬の巡回調査の結果、シロカイガラムシ類の発生ほ場割合が平年よりやや高く、一部では寄生程度の高いほ場も確認されました。</p> <p>シロカイガラムシ類の1種のウメシロカイガラムシは通常年2回発生します。第1世代幼虫の発生期は平年で5月中旬から6月上旬で、この時期が防除適期となります。第2世代幼虫は平年で7月下旬から8月中旬になりますが、この時期はモモの収穫期となるので、防除を行う際は薬剤の選択(収穫前日数)に注意してください。</p>
リンゴ・ナシ	<p>■ナシマルカイガラムシ</p> <p>第1世代のふ化盛期は、気温が2℃高く推移した場合、5月5半旬頃と予想され、防除適期は6月1半旬頃と推定されます(農業総合センター果樹研究所、5月16日現在)。</p> <p>カイガラムシ類はふ化期の防除が重要であるため、防除適期をのがさないようにしてください。ただし、1回の防除では十分ではないため、1週間から10日後にもう一度防除することが望ましいです。</p>

3 野菜・花き

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
夏秋トマト（被覆栽培）	灰色かび病	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	発病葉は摘除し、防除を徹底する。多湿条件で発生が多くなるので換気を十分に行う。
	アブラムシ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。施設開口部をネット被覆していない場合、有翅虫の飛込について注意する。
	コナジラミ類	全 域	－	やや少ない	発生ほ場割合は、平年より低かった（－）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハモグリバエ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	まん延すると防除が困難となるので、発生初期から防除を実施する。
キク（露地栽培）	白さび病	全 域	－	平年並	育苗床からの持ち込みによると考えられる発生が見られたが、発生ほ場割合は平年並であった（±）。	多湿条件が続くと発病しやすくなるので、予防散布に努める。品種により発病に差があるので、発病しやすい品種では防除を徹底する。
	アブラムシ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	ほ場をよく観察し、発生が多い場合は、速やかに防除を実施する。
	ハダニ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	気温が高くなると、急激に発生量が増えるため、低密度時から防除を実施する。抵抗性の発達が懸念されるため、防除薬剤の選択に注意する。
	アザミウマ類	全 域	－	平年並	発生ほ場割合は、平年並であった（±）。	クロゲハナアザミウマの寄生が確認されている。ほ場をよく観察し、葉裏まで薬剤がかかるように防除を徹底する。
	ハモグリバエ類	全 域	－	やや少ない	発生ほ場割合は、平年より低かった（－）。	上位葉での発生に注意し、低密度時から防除を実施する。
リンドウ ※過去9年間の平均値と比較	葉枯病	全 域	－	例年並	発生ほ場割合は、例年並であった（±）。	多湿条件で発生が多くなるので、予防散布に努める。
	ハダニ類	全 域	－	やや少ない	発生ほ場割合は、例年より低かった（－）。	気温が高くなると、急激に発生量が増えるため、ほ場をよく観察し、低密度時から防除を実施する。
	リンドウホソハマキ	全 域	－	例年並	発生ほ場割合は、例年並であった（±）。	春先の高温の影響により、成虫の発生が早まっている可能性がある。ほ場をよく観察し、発生が多い場合は速やかに防除を実施する。

注) 予報の根拠の中で (+) は多発要因、(-) は少発要因、(±) は平年並要因であることを示す。

○注意が必要な病害虫

夏秋トマト	<p>■タバココナジラミと黄化葉巻病 (TYLCV)</p> <p>本年、複数地点において黄化葉巻病 (TYLCV) の発生が確認されています。</p> <p>本病はウイルス病であり、タバココナジラミの媒介により感染します。汁液伝染、種子伝染、土壌伝染はしません。また、タバココナジラミ以外のオンシツコナジラミ等による虫媒伝染はしないため、媒介虫であるタバココナジラミの防除を徹底することが重要です。</p> <p>本病の発生を認めた場合、侵入・脱出防止を心がけ、ほ場内での発生密度が高くなるように発生初期から適切な防除を行ってください。</p> <p>また、未発生地域においても、購入苗等により持ち込むおそれがありますので注意が必要です。</p> <p>病害虫防除所 HP に掲載している病害虫防除情報「注意喚起 黄化葉巻病 (TYLCV) のまん延防止対策」、病害虫ライブラリー野菜花き類「コナジラミ類」もご覧ください。</p> <p>URL : https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/450800.pdf</p> <p>URL : https://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/433113.pdf</p>
リンドウ	<p>■リンドウホソハマキ</p> <p>中通り中部にて、リンドウホソハマキ成虫の発生を確認しています。例年より発生時期がやや早まっている可能性があり、鱗翅目幼虫による生長点の食害も多く見られています。茎内に侵入した幼虫は薬剤防除が難しいので、被害茎は見つけ次第抜き取り、必ず圃場外で処分します。</p>
野菜・花き共通	<p>■オオタバコガ</p> <p>フェロモントラップでの誘殺が中通り北部、浜通り北部、会津中部で確認されています。いずれの地域も、5月1半旬から誘殺が確認されているため、今後の発生に注意してください。</p> <p>本種はトマトやキクの新芽や果実の内部に潜り込んで食害します。特に露地栽培や防虫ネット未展張の施設で被害が予測されるので、生長点付近をよく観察し、寄生や被害が見られた場合は、速やかに防除を行ってください。</p>

より詳しい発生状況や防除対策は、

福島県病害虫防除所ホームページ<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>をご覧ください。

お問い合わせはTEL:024-958-1709、FAX:024-958-1727またはe-mail:yosatsu@pref.fukushima.lg.jpへお願いします。

◆福島県では6月10日から9月10日まで令和6年度農薬危害防止運動を実施します◆
 農薬を使用する際は、ラベルをよく読んで正しく使用しましょう。